

我が故郷の未来に想い……

黨土高市 坂詰真一（黒井出身）

今月（二〇〇二年十月）の十三日に、約二十年ぶりとなる同級会参加を果たした。

さて、帰郷としては二年ぶりである。その際も、今回も感じた事があった。

田舎と言う存在は、やはり素晴らしいモノであるが、町並みを見た瞬間の変わってないという安堵感、その反面、これで良いのだろうかという心配もこみ上げてきた。

今、日本は激動の時代に入っているが、その反面、日本人は変化を拒んでいるように思えてならない。それは、文明の変化はOKだが、精神論はゴメンだよといった具合である。

さて、庶民というと千差万別の意見が出ているが、最も大切なのは、未来を見据えた時の真の国益であって、一部の既得権益ではないという事である。

地元で町作りへの不満が噴出した場面があった。生活に密着性のない企画・運営になっている不統一な町作りへの文句であった。それは、上越ブロック全体への不満でもあった。

どうもコミュニケーションが足りないようだ……。現在の親子関係や国政と同じである。

経営理論では、CRMがやつと本格化しようだが、自治体も同じであって、民というお客様へのサービスとは何ぞやと、そろそろ真剣に考える時期に入っているはずで、相変わらずのお役所的発想では町は良くならないのである。他の自治体は気にせずに、我が上越市はキチンと未来を考え、企業に対峙して議論も含めリーダーシップを発揮すべきである。

翌日十四日の帰り際に、直江津駅前でヨシイケの高橋社長に偶然再会したが、

随分前に駅前のヨシイケも撤退されてしまったようで残念であるが、内外の企業・個人も含め色々なアイデアや意見を聞くべきで、永田町に気をはせるよりも、まめに自身の足で動いて様々なウオッチング・ヒアリングをして、生活面に反映した町作りが成されるべきであると思う帰省になった秋の日でした。



サロンでのスナップ